

自分を見つめて

高三

僕は将来小説家になりたいと考えている。そのため、コンクールに作品を出品しようとしている。僕の小説の書き方は、ふつうの人と違って、自分の考えたストーリーを、パソコンに接続したヘッドホンマイクに話しかけるという方法だ。こうすることで、言葉がパソコン内で文章化され、音声認識が不十分なところだけ訂正の打ち込みをして、小説が書き上げられていく。僕がこのような書き方をするのには理由がある。

それは、僕が思った方向に指を動かすことができず、介助者がいないとパソコンのキーボードを打つことが難しいからだ。次に、僕は漢字を書くことができない。漢字自体は、本と本の内容に合ったCDを読みながら聞くことで覚えられるが、漢字の筆記は文字の形がとらえにくく、縦と横の線が同じように見えたりするので、認識しづらいからだ。

思い返してみると、僕は小さい頃から文字を認識して書くことはできなかった。小学一年生で教科書をひらいても、ひらがなとカタカナをうまく区別することができず、漢字となると、さっぱりわからなかった。国語の「くじらぐも」では、先生の音読やCDを聞いて、内容はわかっているのに、読めないところがチラホラあった。

小学生のうちには、集中して音読を聞くことで文の内容を暗記していたが、中学生になると量が多くなつたため、教科書に合うCDを購入して、家で聞くようになった。さらに、小遣いを貯めて、太宰治、中原中也や金子みすゞの本やCDを買って繰り返し聞いていた。すると、前後の内容から漢字の読みが推測できたり、読むことができたりするようになってきた。努力すれば苦手なことを克服できるとがわかったが、それでも漢字を書くことは難しいと感じる。

書きたい時に思うように書くことができないことが、ストレスになることもある。自分の考えたことを代筆者に伝えて筆記してもらおうときなどは、自分の想いや考えをうまく伝えられず、コミュニ

ケーションストレスが生まれてしまう。自分でも悔しいし、諦めの気持ちが強くなることもある。しかし、介助者がいることで、自分でできることも増えているので、適切な表現の仕方を更に検討していきたいと思う。

これから、小説家になるという夢の実現とともに、自分の力でいろいろなことにトライしていきたい。

